

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2004年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	日本文学 専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部・教授		小峯 和明 印		
自然・人文の別	自然	人文	個人・共同の別	個人	共同 名
研究課題	17・18世紀における〈地獄破り〉物語の研究—『仏鬼軍』を中心に				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程5年		宮腰 直人 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2004		年度		
研究経費	200		千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では17世紀前半あたりからあらわれる〈地獄破り〉を主題とする物語の展開を18世紀までの受容を視野に収め、調査及び考察を試みた。『仏鬼軍』を本文だけでなく挿し絵の表現にも着目し、その物語世界を読み解くことを目指した。調査の過程では新たに〈地獄破り〉物語として認定すべき物語を見出すことができた。17・18世紀の〈地獄破り〉物語がさらに19・20世紀にも広く受容されていたことを明らかにし得た。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[〈地獄破り〉物語] [仏鬼軍] [物語とメディア]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、17・18世紀の〈地獄破り〉物語の調査及び読解を試みた。研究の対象としたのは、『仏鬼軍』を中心とした〈地獄破り〉物語群である。

調査、研究の過程で受容の場の解明が課題として浮び上がってきた。『仏鬼軍』については、現時点の諸本のリストを制作し、それに基づき調査を行い、読解の基礎とした。研究の成果として以下に版本諸本の所蔵リストを掲げる。

- ・元禄10年版 国会図書館 筑波大学 武蔵野美術大学 これ以外に彰考館旧蔵本が『国書総目録』に記載。
- ・文政6年版 上田図書館花月文庫 京都大学谷村文庫 国文学研究資料館 駒沢大学 静岡中央図書館葵文庫 神宮文庫 静嘉堂文庫 中京大学 東京国立博物館 東京芸術大学脇本文庫 東京大学 日本大学 龍谷大学 早稲田大学 成篋堂文庫 東洋大学
- ・天保5年版 大谷大学 京都大学谷村文庫 駒沢大学 徳島県立図書館森文庫
刊年不明本 茨城大学

絵巻及び版本諸本に共通の問題として、まず挿し絵の読解を試みた。ここでは要点のみ述べる。冒頭部分に描かれる〈落下する亡者〉は、片足を曲げているという図像上の特徴をもつ。『矢田地蔵縁起絵』など同時期の地獄を描いた絵巻などにも落下する亡者の図像は描かれるが、その場合、両足を伸ばし、垂直に落下する姿が描かれることが多く、『仏鬼軍』の図像のような事例は珍しい。しかし、『仏鬼軍』と同様の図像が室町末期『往生要集絵巻』(個人蔵)にもみえることが判明した。ささやかな事例ながら、このことにより従来、内容面から密教色が濃いとされていた『仏鬼軍』が、地獄絵という別の視座から比較検証の余地がでてきた。また、いわゆる地獄の釜割れの場面なども含めより地獄や亡者、冥官を描いた絵画とのより広範囲な比較検証が今後の課題となろう。

また、本研究では「物語とメディア」をキーワードに掲げ、特に絵巻の版本化に注目した。次にこの点から明らかにし得たことを述べたい。『仏鬼軍』は最初に絵巻で制作され、ついで版本になった。版本には三種類あることが確認され、それぞれが特徴を有する。元禄版には絵巻の所蔵者である十念寺側による跋文が付されおり、この時点で一休に仮託されて『仏鬼軍』が流布されてきたことが知られる。すでに先行研究によって指摘があるように、元禄版は、絵巻の挿し絵を版本の本文の位置にあわせ挿入するという変更を加えており、絵巻の版本化における工夫をみてとることができる。こうした絵巻の版本における改変については今後様々な事例を積み重ねて検討する必要がある。

文政版には筠庭節信による跋文が付されている。それによれば書肆・万笈堂の英平吉(遵)が「一古家所蔵模本」を手に入れ、それをもとに刊行したという。英平吉が松崎慊堂ら同時代の学者や文人文人と交流があったことはすでに先学により明らかにされている。「一古家所蔵模本」に具体的にどのような諸本を想定すべきか、あるいは出版におけるレトリックと解すべきか、解釈には問題が残るが、英平吉と学者や文人の交流の所産として文政版の刊行を位置づけることもできるかもしれない。また、その点に関していえば、『仏鬼軍』が太田南畝によって所蔵されていたことも注意される事実ではあろう(『南畝文庫蔵書目』)。

研究成果の概要 つづき

南畝の『和漢同詠』には、陸道人「閻魔考」が付され、〈閻魔〉の考証の一助として『仏鬼軍』と『小夜嵐』が参照されており、〈地獄破り〉物語の受容の一端がうかがわれる。ちなみに、南畝は同じ〈地獄破り〉物語の『続小夜嵐』三巻をも所蔵していた(『杏園稗史目録』)。書肆・英平吉の広告(『近世出版広告集』の萬笈堂の項など)では、『仏鬼軍』を一休の「自画自筆」であることをうたっている。

天保版には、さらに推翁禅扣による序文が付されている。先行研究では、管見の及ぶ限り、この推翁禅扣が『仏鬼軍』に序文を寄せていることは注目されてこなかった。本研究の調査により、推翁禅扣の手になる『仏鬼軍』の序文にみえる「～地獄はくるしく極楽はたのしき三才の子もよく是をしる。八十の翁何ゆへにこれをしらざる」と同様の一節が、後の推翁禅扣の著述『仏戒俚語』(天保12年刊)「勸戒」の項・忍耐を説く箇所「八十ノ翁モ三歳孩子モ」として引かれていることが明らかになった。この一節はレトリックの一種(「三歳孩子」の例は『東海夜話』にもあり)ではあるが、これまで、物語内容にのみ注目が集まっていた『仏鬼軍』の受容面を今後明らかにする上でのひとつの手がかりになるように思われる。推翁禅扣についての詳細は未詳だが、『仏戒俚語』の跋文から禅僧であったことが知られる。天保版『仏鬼軍』と『仏戒俚語』はともに、書肆・小川多左衛門(柳枝軒)の手になる。小川多左衛門は禅宗の書物を数多く刊行しており、『仏鬼軍』もその一環に位置づけ得る可能性がでてきた。

また、天保版の挿し絵は菱川清春の手になる。清春は文政版をふまえつつ、見開き単位で画面を構成し直すなどの工夫をしている。文政版が元禄版を模した感が強いのに対し、天保版はさらに清春によって挿し絵の再生をはかっているとみられる。これまでまったく問題にされていないが、元禄版、文政版に比して、天保版の挿し絵は、絵巻と距離をとっている。読本などの挿し絵を手がけた絵師の作画のなかに、天保版を位置づけることも今後の課題となった。

『仏鬼軍』は、物語内容からは禅宗の要素が薄く、それと一休への〈仮託〉をどのように理解するかが大きな課題になっていた。しかし、今回の調査の結果、天保版の序文の解読からは確かに禅宗の参与が確認された。物語内容について、教義面や語句から検証することは従来通り重要な課題ではある。だが、序文や跋文、書肆の動向など版本をめぐる様々な要素を多角的に捉えることで、絵巻に注目が集まることの多かった『仏鬼軍』の研究を対象化し、絵巻の『仏鬼軍』もまたあらたに照射し得ると思われる。

なお、本研究は『仏鬼軍』を中心とした〈地獄破り〉物語の研究ではあるが、調査の過程で『剛者揃』絵巻など関連する資料も数種類発見し得たことを付記しておく。特に『仏鬼軍』と並んで近世後期から近代にかけて〈地獄破り〉物語として受容された『小夜嵐』が、小説『豊臣再興記』の「典拠」とされている点は注目される。これらについては、今後研究を継続し、あらためて紹介することとしたい。